三島市　（通巻　126 号）

郷土資料館だより

Vol.42 No. 3
2020.3.15

箱根八里日本遺産認定１周年記念企画展
「絵図・古文書で見る箱根八里」報告

●開催期間　令和元年９月21日(土)～12月15日(日)
●展示資料数　162点(期間中一部の資料入れ替えあり)　●入場者数　15,098人
●関連事業　（１)企画展展示解説　10/20(日)、11/16(土)①11:00～、②13:30～
計４回　参加者合計73人
（２)箱根八里クイズ　参加者数　子ども向け132人、大人向け112人　計244人
（３)企画展関連講演会　２回　11/２(土)参加者31人、　11/30(土)参加者22人
（４)ふるさと講座　箱根東坂ウォーキング　11/12(木)参加者22人

今回の企画展では江戸時代に記された絵図（パネル展示を含む）や古書・古文書を中心とした展示により箱根西坂を中心とした箱根路の当時の情景を紹介しました。「箱根関所絵図」（小田原市立図書館蔵)、「三島宿之古記録」（スルガ銀行社史図書館所蔵)、元禄３年（1690）版「東海道分間絵図」（関守敏氏所蔵）などの貴重な資料をお借りして展示することができ、その他「東海道分間延絵図」などをパネルで紹介しました。また、期間中開催した箱根八里クイズでは子ども用・大人用の２種類を用意し、成績優秀な方への記念品として古銭（一文銭）やオリジナルみしまるくんバッジを用意したこともあったためか、多くの方に参加していただくことができました。

企画展「浮世絵でたどる東海道五十三次と四つ辻のまち三島」開催

●開催期間　前期:令和２年４月18日(土)～５月10日(日)　後期:５月23日(土)～６月28日(日)
●会　　場　郷土資料館１階企画展示室

江戸時代の三島は東海道五十三次のうちの宿場町のひとつで、宿内に三島明神（三嶋大社）があり、東に東海道一の難所とされる箱根路が控えていたため、多くの旅人でにぎわいました。また、町を東西に貫く東海道の他、北へ佐野街道（甲州街道)、南へ下田街道が伸びる四つ辻のまちであり、交通の要衝として繁栄しました。

この企画展では、令和元年９月に全国街道交流会議を通してトッパン・フォームズ（株）より寄贈された「保永堂版『東海道五拾三次』絵巻」を展示します。これは、米国ボストン美術館が所蔵する浮世絵コレクションから厳選した作品を最新のデジタル技術を使い精巧に複製したものです。

◀保永堂版『東海道五拾三次』絵巻

この絵巻を中心に館蔵の三島宿関連浮世絵・三嶋暦・「伊豆国全図」（武田善政作）などを展示することで、江戸時代の東海道とその宿場町として繁栄した三島宿を紹介します。

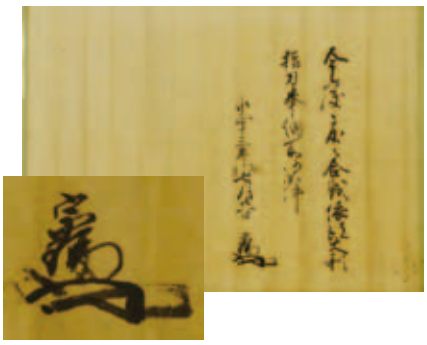
三嶋大社の古文書を読み解く　9

◆伊勢宗瑞、刀を奉納する

a）宗瑞文書を読む

宗瑞という署名と花押があります。伊勢宗瑞、別名北条早雲の古文書です。簡潔ながら流れの良い文字が書かれた文面には、「この度、重ねての合戦で大勝利を得たので、（三嶋大社に）指刀を奉納いたします」とあります。文書のなかには具体的な地名や用語が全く出てきませんが、年月日を手がかりにすると、どの様な歴史事象に関わる古文書かがわかります。

伊勢宗瑞判物（指刀奉納状）



今度、度々合戦に大利を得るに依り、指刀奉納する所、仍って件の如し。
永正十三年丙子七月廿一日　宗瑞（花押）

この奉納状が出された永正13年（1516）7月は相模攻略がなった時期です。最後まで抵抗する三浦道寸・義意父子を助けるため出兵してきた、扇谷上杉朝興を撃退し、余力を駆って新井城（神奈川県三浦市）の三浦父子を総攻撃し、これを滅ぼしました。7月11日のことです。その10日後の日付ですから、直接は、この三浦氏討滅戦に関わるものだろうということが言えます。指刀と書かれていますので、この合戦で身につけていたか、普段指の刀ではないかとみられます。宗瑞が、この勝利をいかに重視していたかがわかります。

宗瑞の相模侵攻は簡単に成し遂げられたものではありません。彼には、電撃的に伊豆を攻略し、その後は小田原城を始め、次々と敵の拠点を奪い取った知将・謀将というイメージがありますが、実際は複雑な政治状況と関わりつつ、苦心しながら版図を広げたものです。その領域は、伊豆から神奈川県西部、横浜市南部、三浦半島までであり、後の後北条氏領国と比べると小さく見えますが、後北条氏の勢力伸長の核となった地域です。殊に三浦氏の滅亡は、相模国の反対勢力をほぼ屈服させたことを示す画期的勝利でした。

なお、武将による刀剣奉納は、鎌倉期以降盛んになって、三嶋大社にも、鎌倉幕府執権北条氏による奉納太刀、室町幕府関東管領家上杉氏の奉納太刀などが伝えられ（明治時代に宮中御留置となり現在は東京国立博物館所蔵）、『吾妻鏡』には、源頼朝の刀剣奉納の記事も見えます。武将にとっての刀剣奉納は、信仰の深さを示す最高の崇敬表現の一つとして、定着したのでしょう。

b）変わりつつある宗瑞像

さて、かつて一介の素浪人から戦国大名へと上り詰めたと信じられた宗瑞ですが、近年では丹念な史料探索と分析が進み、履歴などに大きく変更が加えられています。彼の出自は、室町幕府の政所執事（長官）を務めた名門伊勢氏の同族、備中伊勢氏で、盛時と名乗っていたことがわかっています。彼自身も将軍足利義尚の申次衆・奉公衆を務めていて決して素浪人ではありませんでした。こうした立場を背景に、駿河今川氏の家督争いに介入して甥の氏親を今川当主とすることにも成功しています。さらに氏親の補佐として今川家に残った宗瑞は、京都の政変で将軍に就いた足利義澄の指示を受け、伊豆への侵攻を開始したと考えられています。中央政界と彼の動きは、絶えず関わりをもちつつ展開したのです。

また、永正16年（1519）に没した彼は、この時88歳であったといい、かつては50歳を過ぎてから世に出た大器晩成の代表例として持て囃されました。しかし、近年は二回り若い64歳で没したという説が有力視され、もっと若くして活躍していたと考えられています。ちなみに、一般に北条早雲と称されますが、これは江戸時代以降の俗称で、伊勢から北条へ苗字を変えたのは、第二代氏綱だとわかっています。また出家名についても、早雲庵宗瑞と号していますから、早雲ではなく宗瑞と呼ぶべきもの。ちなみに、宗瑞の死後につけられた戒名は「早雲寺殿天岳宗瑞公大禅定門」なので、死後の彼は早雲寺殿と尊称されたはずです。そこから早雲の名が定着したのでしょう。

（三島市郷土資料館運営協議会委員・奥村徹也／三嶋大社宝物館学芸員）

三島の歴史とジオポイント 18

―六所王子神社―

三嶋大社の東約 300 m、薬師院と光安寺の間の小道を入った日ノ出町６番 90 号に鎮座します。当社は三島大社の祭神・事代主命（ことしろぬしのみこと）の王子６柱をお祀りする三嶋大社の摂社です。沿革は不明ですが、「東海道分間延絵図」（1806 年）には「六所宮」として描かれています。

約 60 坪の境内を取り巻く玉垣の前面は層理（浅海底で堆積した際できる縞模様）が目立つ長岡凝灰岩上部層製（数百万年前に火山灰が海底に堆積したもの。産地は伊豆の国市・北江間）です。「昭和５年の北伊豆地震で壊れたので、当局からの交付金で作り直した」と彫られています。

六所王子神社正面

鳥居は花崗岩製で平成 22 年に新設されました。古い鳥居の笠木が境内右手奥に、柱が境内の右手に一本保存されています。石材は北江間から産出する安山岩（数百万年前の火山の本体）のようです。

左手には、たくさんの石造物が並んでいます。手前の神社名碑は北江間から産出する安山岩製で、伊豆国・江間村の石工が刻んだとあります。

基礎石は三島溶岩（富士山起源・約１万年前）の上に御殿場泥流起源（富士山東斜面・約 2700 年前）の大石が重ねてあります。設置年は不明ですが、江間村は明治 22 年～昭和 29 年まで存在しました。隣の花崗岩製の石碑（昭和 40 年製）には、旧長谷町の由来が彫りこまれています。

隣の石燈籠は、宝珠・傘・火袋を欠き、中台・竿と３段重ねの基礎の上部２段は褐色・砂質の長岡凝灰岩上部層製です。基礎最下部は三島溶岩製です。基礎を高く積み重ねるのは街道筋に置かれた常夜燈の特徴です。竿には「文化３（1806）年・秋葉山常夜燈」とあるので、町内の東海道筋に置かれていた常夜燈が道路の拡張工事の際に移設されたものです。

常夜燈と小祠２基

「東海道分間延絵図」には、街道沿いの薬師院参道入り口に、燈籠が描かれているので、これが移築されたものと思われます。

一番奥には、長岡凝灰岩上部層製の小さな石祠が２基置かれています。個人宅の神様を祀っていたものかもしれません。基礎は長岡凝灰岩上部層と大井凝灰角礫岩（数百万年前の海底火山の堆積物。沼津市・大平産）を使用しています。

境内右手の明治 31 年に奉納された安山岩製燈籠の火袋には「大正 12 年９月の関東地震で破損したので作り直した」と彫られています。

社務所前の安山岩製で円柱状の燈籠は、安永５（1776）年と古く、「奉納御神燈」と彫られています。当社の名が無いので、三嶋大社から移設されたものかもしれません。

安山岩製（北江間産）の手水鉢は昭和２年に奉納されたものです。同時に奉納された狛犬は北伊豆地震で台座から落ちて壊れ、最近まで本殿脇に置かれていましたが、平成 22 年に花崗岩製の狛犬が新調され、姿を消しました。

本社は小規模な神社ですが、三島宿に大被害を与えた関東・北伊豆地震による被害の様子を具体的に確認できる石造物が複数あり、非常に珍しく貴重です。

（三島市郷土資料館運営協議会委員・増島淳）

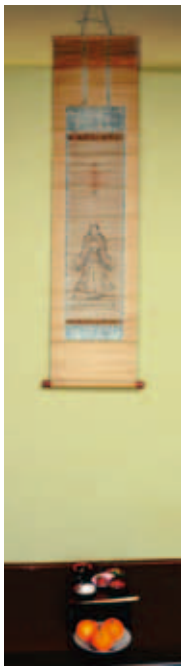
多呂の淡島講　―最後のお祈り―

▲淡島明神掛軸

■「淡島さん」「淡島さん」の名で親しまれる淡島明神への信仰は、和歌山市加太（かだ）の淡島神社を中心として全国各地で見られます。淡島明神は、住吉神（すみよしのかみ）の妃神であったとされ、白帯下（こしけ）の病（婦人病の一つ）のために加太浦に流されたと伝えられており、女性の病平癒や子授け・安産・縁結び・厄除（やくよ）けや裁縫技術上達などにご利益があるとされています。江戸時代中期以降、「淡島願人（がんにん）」と呼ばれる人たちが、明神の絵姿を入れた箱を背負いながら縁起や功徳を説いて各地を回り、この信仰を広めていきました。

■淡島講　信仰や経済、職業上の目的を達成するために結ばれた集団のことを「講」といいます。「淡島さん」への信仰を目的として結成される「淡島講」の場合は、一般的に地域の既婚女性、特に「お嫁さん」たちの講とされていて、その開催形態は年に数回、メンバーが集まって「淡島さん」にお祈りし、食事や茶菓子の共同飲食を行う、という形が多いようです。

■多呂の淡島講　―最後のお祈り―　令和元年 11 月、多呂の淡島講のメンバーである小島さんから郷土資料館へ、「講を終わりにすることを決めたので、その道具などを寄贈したい」という連絡をいただきました。そこで当館で最後の講の様子の取材・記録させていただきましたので、以下に紹介します。



▲掛軸と供物

多呂の最後の淡島講は、令和元年 12 月 14 日（土）10 時から、多呂公民館で行われました。当日は現メンバーの７名（１名欠席）に加え、今回が最後になるということで、特別に、既に講を引退したメンバー９名も集まりました。

①会場の準備　開始前、当番が中心となって会場が整えられました。公民館の和室の床の間に「淡島さん」の掛軸をかけ、その前に供物を盛った御膳を据え、また別に参加者用の机を用意してお茶菓子を並べ、人数分の座布団を敷きます。

②メンバーの会場入り　講のメンバーは、会場に入るとまず「淡島さん」にお参りし、その後、机の周りに用意された座布団に順次着席していきました。

▲講開始時の様子

③講の開始　参加者がそろったところで、当番から講の開始が告げられます。まず最初に現メンバーから、今回をもって淡島講を終了するという報告が行われました。今後、後継者を得られる見込みがなく、話し合いを重ねた結果、終了を決断されたということです。「淡島さん」の掛軸については、お焚き上げや地域の神社での保存等も検討したが、そのままの形で末永く残したいという思いから、三嶋大社で清祓（きよめはらい）をしていただき、神さま不在の“道具”に戻した後に、収蔵庫での管理が可能な郷土資料館へ寄贈することを決めた、という経緯が報告されました。このお話を受けて、元メンバーの新井綾子さん（昭和 15 年生）から、たくさん悩まれた末に講の終了を決断されるにいたった現メンバーへ、感謝の言葉が贈られました。

通常の開催では、このあと２時間ほどお茶菓子を食べながら情報交換などを行いますが、今回は当館が取材するということで、過去の開催時の様子を中心に、思い出話などを話していただきました（後述）。

１時間ほど経って、講の終了が告げられました。これで最後となるため、参加者全員で掛軸の前に正座し、手を合わせて「淡島さん」にお礼のお祈りを行いました（通常は終了後、直ちに会場の片付けに移行）。

④会場の片付け・神像等の寄贈　講終了後は当番が中心となって会場を片付けます。解散後、「淡島さん」の掛軸と供物用の御膳は箱に納めて現メンバーの手で三嶋大社へ運ばれ、清祓をしたのち、郷土資料館が受贈しました。長年にわたり多呂の女性たちを守ってきた「淡島さん」は、ここにその役目を終えることとなりました。

最後のお祈りの様子▶

■多呂の淡島講　今昔　多呂の淡島講は、１世紀以上にわたって行われてきたといわれています。「淡島さん」は、「子どもが授かりますように」、また「生まれた子が無事に育ちますように」という祈りを聞き入れてくれる神さまであると伝えられてきました。

▲供物

▲通常のお参りの様子

講の開催は５・10月の年２回、当番の都合のつく土日に、19時（各家夕食を済ませた後）から２時間程度行われます。

講の準備を行なう当番は、持ち回り制で、２軒の家が担当します。「淡島さん」の掛軸と供物を盛る御膳を自宅で保管し、開催の連絡、参加費の徴収、供物・参加者用の飲食物の支度、会場の用意などを行います。供物は、ご飯・煮物・味噌汁・漬物・果物等の五つで、専用の御膳に盛り付けます。

講の参加者は、会場入りしたらまず「淡島さん」に手を合わせます。その後、机を囲んでお茶菓子を一緒に食べながら、子育てに関する相談や地域のことなど、様々なおしゃべりを楽しみつつ情報交換を行う、というのが近年実施されてきた形態です。

【かつての淡島講の実施形態】

今回参加された新井さん（上掲）・芹沢銀さん（昭和８年生）・原久子さん（昭和10年生）・原栄子さん（昭和12年生）・杉山京子さん（昭和17年生）ら、既に講を引退したメンバーの方たちから、かつての淡島講の開催の様子についてお話をうかがうことができました。

皆さんのお話によれば、多呂の淡島講の参加者は、多呂村の成立当初からこの地に家を構えている16軒のお家のお嫁さんたちで、お嫁入りした女性はこの講に参加し、お姑さんの立場になった女性は引退する、という形で世代交代が行われてきたそうです。講の開催は、もともと年４回（２・４・６・９の小の月）だったものが、時代の変化にあわせて年３回（１・４・９月）に減り、さらに２回に縮小して現在の形に至りました。また、講でお茶菓子を出すようになったのは昭和60年代以降のことで、それ以前は食事を用意し、開始時間も今より１時間早く、18時から行っていたということです。食事は丼（どんぶり）に山盛りにした三色ご飯（鯖や鰯のオボロ / 桜デンブ / ニンジンと油揚げの煮物〈または炒り卵〉の３種）と味噌汁、漬物でした。講の前日には当番がリヤカーを引き、メンバーの家を一軒一軒訪ねて１人分の米１合と丼を回収し、翌日の開始時刻まで人数分の料理づくりに追われたといいます。また米１合を使って作った丼は、到底食べきれる量ではないため、皆、半分ほどを残して持って帰っていたそうです。

時代の移り変わりにあわせて開催形態を変えながら現代に続いた多呂の淡島講は、この日、終焉を迎えました。それは信仰の場であるとともに、新たに地域の仲間入りを果たしたお嫁さんの緊張をやわらげ、家同士の親交を深め、子育てをはじめとする情報共有の場ともなるなど、多面的な役割を担う場でもあったようです。

企画展関連講演会報告

企画展「絵図・古文書で見る箱根八里」関連事業として講演会を２回開催しました。展示では主に箱根西坂を取り上げたため、講演会では西坂の両端にある三島・箱根両宿場町について講演していただきました。

第１回「箱根八里の公用人馬継立の制度と実態」
●開催日時　11/２（土）13：30～
●講　　師　厚地淳司氏（静岡県地域史研究会幹事）
●会　　場　郷土資料館１階多目的室　●参加者　31 人
第２回「再顧！箱根関所～箱根関所設置 400 年を迎えて～」
●開催日時　11/30（土）13：30～
●講　　師　大和田公一氏（箱根町箱根関所所長）
●会　　場　郷土資料館１階多目的室　●参加者　22 人

第１回会場風景

ふるさと講座「箱根東坂ウォーキング」報告

企画展「絵図･古文書で見る箱根八里」開催に関連し､箱根東坂の旧街道を歩き､沿道の史跡等をめぐるツアーを開催しました。昼なおほの暗い杉並木の道を抜けると目の前には芦ノ湖の絶景が広がり、風光明媚な東海道の旅の楽しさを味わいつつも、険しい上り下りが続く石畳の歩きにくさに往時の旅の過酷さを感じました。箱根関所をはじめ沿道の史跡などでは講師による解説があり、箱根路について理解が深まりました。長い石畳の旧街道を歩き終え、終着点の甘酒茶屋でふるまわれた甘酒の美味しさが身に染みる一日となりました。

●開催日時　11 月 12 日（火）９：00～16：00
●講　　師　齋藤幸蔵氏
（ふるさとガイドの会、郷土資料館運営協議会委員）
●行　　程　箱根関所、箱根旧街道東坂、お玉観音、甘酒茶屋など
●参加者　22 名

富士・沼津・三島３市博物館講座報告

●開催日時　２月 11 日（火・祝）14：00～16：00
●講　　師　池谷信之氏（明治大学黒耀石研究センター客員研究員）
●会場　三島市民生涯学習センター３階多目的ホール　●参加者　67 人

令和２年度に開催する富士・沼津・三島３市博物館連絡協議会共同企画展「採る・捕る・獲る」に向けた講座として、石器の材料となる黒曜石の研究を行っている池谷信之氏を講師として、箱根山や愛鷹山で行われた狩猟をテーマとした講演会を行いました。

縄文時代以前の人々がどのように狩りをしていたのか、狩りの道具である黒曜石をどのように入手していたのかについて、遺跡や石器からの考古学的なアプローチだけではなく、民俗学的な知見も踏まえた観点からのお話で、当時の人々の生活圏・交流圏の広さがうかがえる内容でした。終了後には多くの質問があり、参加者の皆さんにとって刺激的な２時間となったようでした。

郷土教室の報告

郷土資料館では、楽しみながら学べる郷土教室（体験イベント）をボランティアさんと一緒に開催しています。2019 年 11 月から 2020 年２月までに行った事業をご紹介します。

日程	郷土教室	内容	参加者
11月2日(土)	楽寿園の自然	ドングリ工作と葉っぱの拓本作り	144 人
11月10日(日)	江戸時代の三島宿	立版古づくりと展示ガイド	44 人
11月23日(土祝)	昔のどうぐ	小麦粘土でミニチュアうどんづくり、 鰹節削り・石臼の体験	65 人
12月7日(土)	わら細工	わらを使った正月の輪かざりづくり	45 人
1月18日(土)	リリアン編み	毛糸を使ったリリアン編みで 干支のねずみの編みぐるみづくり	８人
2月1日(土)	型染め体験	伝統的な技法を使ったカードづくり	41 人
2月23日(日祝)	遊んで学ぼう富士山デー	富士山の溶岩観察、 富士山にちなんだカルタあそび	160 人

楽寿園の自然

ワラ細工

そよかぜ学習

●学習内容　体験学習　昔の道具の体験
　　館内見学　２階常設展示室の解説
●受け入れ学校数　市内 12 校・市外２校

本年度も市内・周辺市町の小学３年生の課外授業「そよかぜ学習」の受け入れを実施しました。１階多目的室では石臼・足踏み式ミシンを実際に動かしてもらい、２階常設展示室では農家にあがって囲炉裏の役割や自在鉤・箱膳の使い方について解説を聞いてもらいました。絵や写真でしか目にしたことのない囲炉裏端に座ると皆さんソワソワした様子で、自在鉤を動かしたときには「おおっ！」という驚きの声があがっていました。

寄贈・購入資料の紹介

2019年11月から2020年1月までに、次の方々から貴重な資料をご寄贈いただきました。お礼申し上げます（お名前の掲載を希望されない方は､｢三島市｣等としてあります）。また新たに1点の資料を購入しました。

●寄贈資料

寄贈者	資料名	点数
藤岡武雄氏	永井ふさ子の歌稿のコピー等を納めたファイル	22点
個人（三島市）	パンフレット『文楽』（三島白百合会主催、昭和26年上演）、絵はがき等	74点
多呂淡島講	淡島明神掛軸（木箱あり、同箱内に『女講事人名簿』『ねせものの秘訣』を納める）、御膳、ノート（講の記録）	3点
個人（東京都）	写真（昭和18年三島青年学校）	1点
個人（三島市）	浴衣（三島市周辺の商店の手ぬぐいで仕立てたもの）	2点

●購入資料

駿豆地方大震災画報	昭和5年北伊豆震災の新聞号外（｢新愛知｣｢大阪朝日新聞｣｢名古屋新聞｣）	4点

刊行図書のご案内

『箱根八里日本遺産1周年記念絵図･古文書で見る箱根八里』令和元年9月21日刊行（頒布価格600円）

江戸時代、箱根路は「箱根八里」とも呼ばれ、急勾配で長距離の坂道や箱根関所があるために東海道随一の難所とされていた一方で、歌心を誘う富士山の眺望や様々な名所、茶屋での休憩といった旅の楽しみもありました。江戸時代の絵図や古文書からわかる箱根路の様子を、主に西坂を中心に解説した図録です。

『中鈴木家文書史料集』（1）令和2年1月10日刊行（頒布価格500円）

三島宿近郊に位置した中村（現在の三島市中地区）において、近世を通じて名主を勤めた鈴木家に伝来した文書の内、主に三島宿の助郷（すけごう）に関する文書を集めた翻刻集です。江戸時代の交通史や三島宿について研究したい方には必読の一冊となっています。

『三島市郷土資料館研究報告』12 令和2年3月16日刊行予定（頒布価格未定）

毎年恒例の研究報告もおかげ様で12号を数えるまでになりました。今年も近世、近代の三島の歴史に加え、三島市民が大いに関心を寄せる三島宿内のジオポイントについての考察が掲載されております。地域の歴史・文化・自然を深く知るための一冊です。

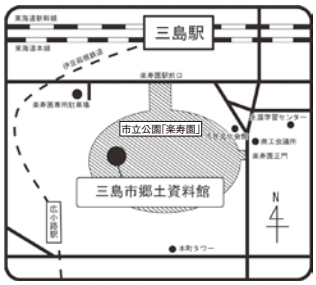
【内容】

明治初期地方における警察・司法について―コレラと貧民党事件―　桜井祥行
近世箱根路の石道（石畳）維持補修と石道金について　平林研治
「ジオツアー三島宿」の成果（8）―三島宿のジオポイント20選―　増島　淳

郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228　FAX 055-971-6045

開館時間　午前9時～午後5時（4月～10月）
　　午前9時～午後4時30分（11月～3月）
休 館 日　毎週月曜日（祝日のときは翌平日）、年末年始
入 館 料　無料（ただし楽寿園入園料として別途300円かかります。15歳未満は無料、学生は学生証提示にて無料。）



三島駅（南口）から徒歩5分。

郷土資料館だより

Vol.42 No.3（第126号）
発行日 令和2年3月15日（年3回発行）
編　集　三島市郷土資料館
発　行　三島市教育委員会
E-mail : kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp
URL : http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/